

1 た・づ・な

「強い馬づくりと今後の軽種馬流通」

日本中央競馬会
馬事部長

田 辺 博 章



本年3月の人事異動で馬事部長に就任いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

馬事部での勤務は平成8年以来13年ぶりになりますが、その当時と比べるとわが国の育成環境は大きく様変わりしました。筆者が美浦トレーニングセンターの競走馬診療所に勤務していた昭和50年代、東西のトレーニングセンターで未だ多くの競走馬が騎乗馴致されていきました。当時はブレーキング（騎乗馴致）という言葉さえ耳慣れないものであり、入厩検疫を受ける2歳馬（現1歳馬）の多くはあまり人の手がかかっていなかったため、掴ませるのも一苦労といった若馬が少なくありませんでした。その頃から比べると、最近の日本の競走馬の大人しさや育成技術水準の高さには正に隔世の感があります。勿論、こうしたことは一朝一夕に実現したわけではありません。

平成8年、JRAでは組織改正により馬事部馬事課の生産関連業務が独立し、生産育成対策室が新設されましたが、同年、当対策室を事務局とする軽種馬生産育成対策協議会が立ち上げられ、わが国の生産育成のあり方について広範な視点から協議が行われました。特に、「強い馬づくり」を推進するうえで大きく立ち遅れていた育成・調教技術の向上にどのように取り組むべきか、多岐に亘る議論がなされました。その後、同協議会の答申書に基づいて育成対策が講じられてきたことは申し上げるまでもありません。また、JRAにおいても、わが国の育成技術の向上を図るため、職員を海外競馬先進国に派遣し、先進技術の習得とその普及に努めてきました。今ではすっかり普及されているロングレーンを用いたドライビングも、当時は斬新なものとして受け取られていたものでした。海外の先進技術を取り入れ、またわが国にあった形に修正された育成方法は今ではすっかり根ざし、勿論育成者によって若干の違いはあるものの、今ではすっかり日常的なものとなりました。このようにして著しく向上してきたわが国の育成技術が、強い馬づくりに極めて大きな役割を果たしたことに疑いの余地はありません。

日高育成総合施設軽種馬育成調教場は平成5年の開場以来、年々その利用頭数が増加しています。本年4月には760頭を超えるまでに至っており、わが国の中心的な育成調教場のひとつとして大きく発展してきました。また、利用馬の競走時の活躍にも目覚ましいものがあり、高松宮記念を優勝したローレルゲレイロ、NHKマイルカップ

を制したジョーカプチャーノ、宝塚記念2着のサクラメガワンダーなど、重賞勝ち馬を続々と輩出しています。このように多くの活躍馬が出たことには、同育成調教場を利用する育成者の技術向上が背景としてあったことは申し上げるまでもありません。これからは、地元浦河ばかりでなく道外も含め、より多くの育成者の皆様が利用されることを期待しています。

JRAの日高と宮崎両育成牧場では、育成技術の開発とその普及に取り組むことは勿論、これまで経験的に行われてきた生産・育成に対して科学的な視点を取り入れるべく、生産育成の調査研究を推進しています。その研究成果については様々な媒体を通じて情報提供しており、これからも情報を発信してまいります。育成者の皆様には自らの育成技術の向上のためご活用いただければと思っています。

ところで、せり市場の動向に目を転じますと、未曾有の経済不況のなか、海外の市場においては著しく売却成績が悪化しており、わが国における今年の市場も大変厳しいものになるであろうと危惧されています。7月までに終了したせり市場の成績を顧みただけでは、2歳トレーニングセール及び1歳馬市場は堅調に推移しているのに対し、当歳馬市場においては平均価格や売却率が大幅に下落し、大変厳しい結果となっており、購買者のニーズがリスクの大きい当歳馬から1歳馬や2歳馬にシフトしてきているように感じています。この傾向が今後も続くのかどうか、せり市場の動向を注視していく必要があります。

また、大局的な観点で軽種馬流通を捉えてみますと、市場振興に向けての最大の問題は、地方競馬の低迷を背景とした競走馬需要の落ち込みによる販路の縮小にあるといえます。今後、この傾向が持続すれば、わが国の軽種馬生産・育成への大きな影響は避けられません。そこで、このような状況を改善するためには、香港やシンガポールなどのアジア諸国は勿論、アメリカや欧州、豪州にも対象を拡げて、新たな販路の開拓に取り組む必要があります。現在、日本軽種馬協会では、「軽種馬海外流通促進事業」として、主にアジア諸国に対する日本産馬販売のためのプロモーションなどの活動を展開しています。JRAでは、日本の競馬の将来に亘る発展のため、こうした活動を支援していきたいと考えています。

これまでお話しさせて頂きましたとおり、JRAは競馬の更なる発展を目指し、これからも着実に取り組んでまいります。皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。